

「公印省略」

22病防第10号の11
平成23年1月20日

各関係機関団体の長 } 殿
各病虫害防除員 }

福岡県病虫害防除所長

平成22年度病虫害発生予報第11号(2月)について

このことについて、病虫害発生予報第11号を発表したので送付します。

予報第11号

向こう1か月間の主な病虫害の発生動向は、次のように予想されます。

作物名	病虫害名	発生量 (現況)	発生量 (予想)	
		平年比	平年比	前年比
イチゴ	うどんこ病	やや少	やや少	やや少
	ハダニ類	やや多	やや多	やや多
ナス	すすかび病	やや少	やや少	やや少
	ミナミキイロアザミウマ	多	多	多
トマト	灰色かび病	やや多	やや多	やや多
キュウリ	べと病	やや少	並	やや多
	うどんこ病	やや多	やや多	やや多
野菜共通	コナジラミ類	並	並	並

<予想される向こう1か月の天候>

天気は、平年と同様に曇りや雨または雪の日が多いでしょう。

向こう1か月の気温は低いでしょう。降水量は多く、日照時間は平年並か少ないでしょう。

週別の気温は、1週目、2週目とも低く、3～4週目は、平年並か低いでしょう。

向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（％）

要素	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	70	20	10
降水量	30	30	40
日照時間	40	40	20

(福岡管区気象台 平成23年1月14日発表抜粋)

作物別発生予報

注：予報の根拠の末尾の（ ）書きは、（+）は発生を助長する要因、（-）は発生を抑制する要因、（±）は発生の助長及び抑制に影響の少ない要因であることを示す。

【野菜】

1 イチゴうどんこ病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや少

(2) 予報の根拠

ア 1月3半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった（-）。

発病株率 0.3%（平年 1.3%、前年 1.2%）

発病果率 0%（平年 0.2%、前年 0.1%）

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は低く、降水量は多いとされている（+）。

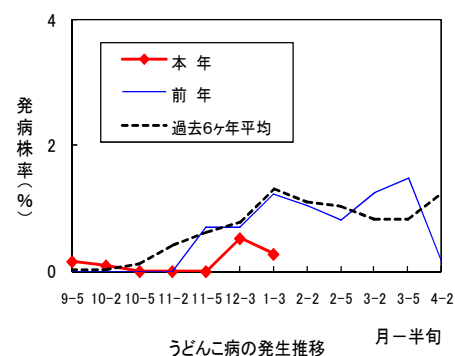
(3) 防除上の注意

ア 早期発見に努め、下葉かぎ後、薬剤が葉裏にもかかるよう丁寧に散布する。

イ ハウスの換気を行い、湿度の低下を図る。

ウ 発生後の防除は効果が低いので、発生前からの予防散布に努める。

薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を控え、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



2 イチゴのハダニ類

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 1月3半旬調査の結果、発生量は平年よりやや多かった（+）。

寄生株率 14.5%（平年 11.3%、前年 6.9%）

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は低く、降水量は多いとされている（-）。

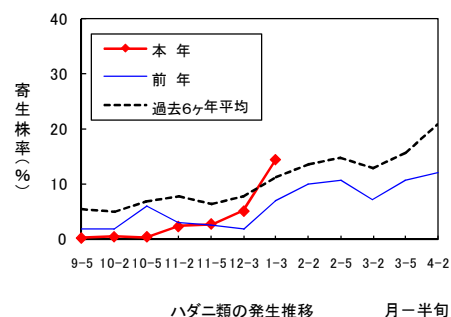
(3) 防除上の注意

ア 本種は、始めスポット的に発生し、地面に接した下位葉ほど寄生が多いので、葉かぎ等の管理作業時によく観察し、発生を認めたら早めに防除を行う。

イ 防除は摘葉後に行い、薬剤が葉裏にも十分にかかるよう散布する。

ウ 摘葉や除草した雑草は、ほ場内に放置せず、ビニル袋に入れ密閉して処分する。

エ カブリダニ類を放飼しているほ場では、天敵に対して影響の少ない殺ダニ剤を散布する。



3 ナスすすかび病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや少

(2) 予報の根拠

ア 1月3半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった(－)。

発病葉率 4.1% (平年 18.3%、前年 19.6%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は低く、降水量は多いとされている(+)。

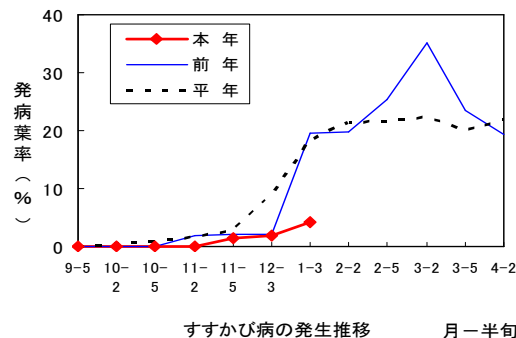
(3) 防除上の注意

ア 着果負担等で、樹勢が低下する時期に発生が多くなるので注意する。

イ 病勢が進展してからでは防除が困難であるため、発病初期のうちに防除を徹底する。

ウ 発病葉はできるだけ除去し、ほ場外に持ち出し処分する。

エ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を控え、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



すすかび病の発生推移 月-半旬

4 ナスのミナキイロアザミウマ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年より多

(2) 予報の根拠

ア 1月3半旬調査結果、発生量は平年より多かった(+)

寄生葉率 26.6% (平年 5.2%、前年 8.8%)

被害果率 0.6% (平年 0.5%、前年 0.4%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は低く、降水量は多いとされている(－)。

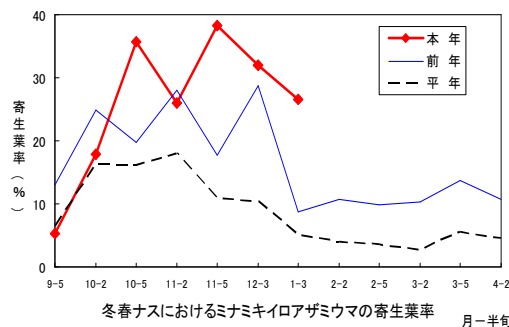
(3) 防除上の注意

ア 葉裏の寄生が多いので、薬剤が葉裏にもかかるよう丁寧に散布する。

多発した場合は、約1週間後に再度薬剤散布を行う。

イ ほ場内外の雑草を除去し、害虫の生息、増殖源を絶つ。

ウ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を控え、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



冬春ナスにおけるミナキイロアザミウマの寄生率 月-半旬

5 トマト灰色かび病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 1月3半旬調査の結果、発生量は平年よりやや多かった(+)

発病果率 0.6% (平年 0.1%、前年 0.1%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は低く、降水量は多いとされている(+)。

(3) 防除上の注意

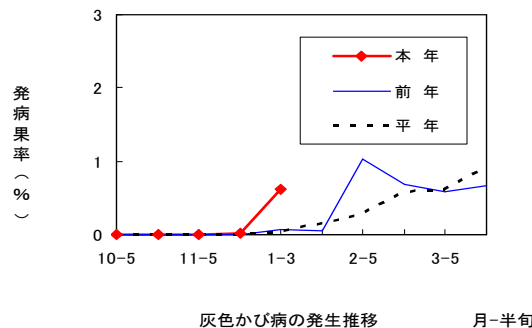
ア 罹病葉、葉先枯れ、罹病果は見つけ次第処分する。

イ ハウスの換気を行い、湿度の低下を図る。

ウ 開花後の萎れた花卉は、伝染源となるので取り除く。

エ 農薬の散布は晴天の日中に行い、十分に換気して夕方密閉するまでに、薬液が乾くようにする。

オ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を控え、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



灰色かび病の発生推移 月-半旬

6 キュウリべと病

(1) 予報の内容

発生量：平年並、前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 1月3半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった(－)。

発病葉率 1.7% (平年 4.3%、前年 1.1%)

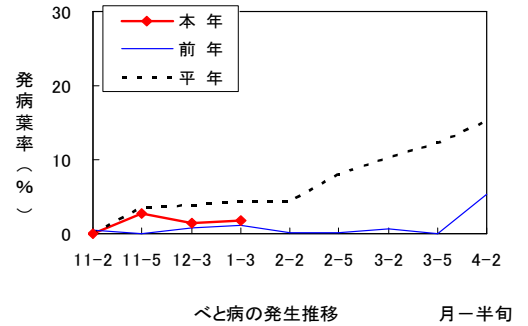
イ 向こう1か月の気象予報では、気温は低く、降水量は多いとされている(+)

(3) 防除上の注意

ア 草勢が低下すると発病が助長されるので、適正な肥培管理を行う。

イ ハウスの換気を行い、多湿にならないよう管理する。

ウ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を控え、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



7 キュウリうどんこ病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 1月3半旬調査の結果、発生量は平年よりやや多かった(+)

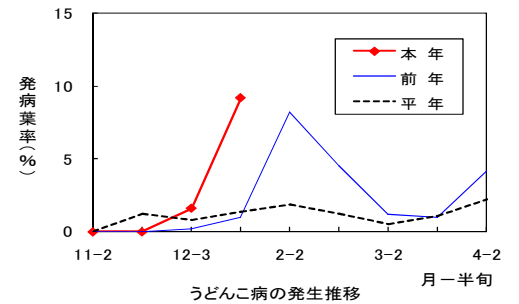
発病葉率 9.2% (平年 1.4%、前年 1.0%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は低く、降水量は多いとされている(+)

(3) 防除上の注意

ア 罹病葉は早めに除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。

イ ハウスの換気を行い、多湿にならないよう管理する。



8 コナジラミ類 (野菜共通)

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 1月3半旬調査結果、発生量は平年並であった(±)。

ナス寄生葉率 6.6% (平年 12.1%、前年 18.0%)

トマト寄生葉率 1.5% (平年 1.5%、前年 0%)

キュウリ寄生葉率 0% (平年 0.4%、前年 0.4%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は低く、降水量は多いとされている(－)。

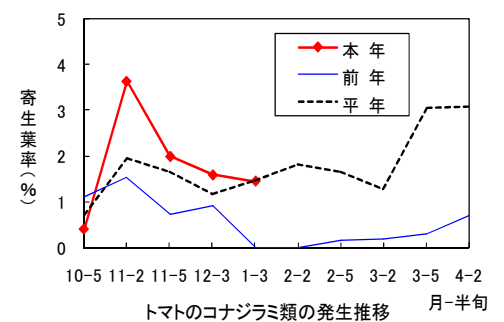
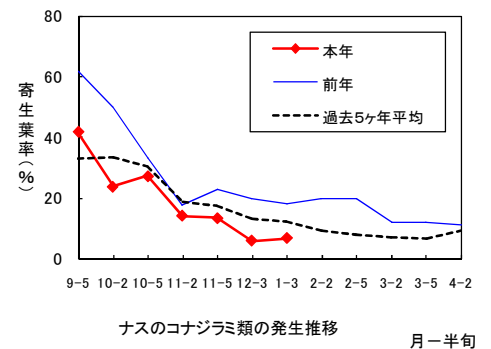
(3) 防除上の注意

ア タバココナジラミ類はトマト黄化葉巻病 (TYLCV) やキュウリ退緑黄化病 (CCYV) の媒介虫なので、早期発見に努め、防除を徹底する。

イ 幼虫や蛹が寄生している下位葉を除去し、施設内の密度を下げるとともに、葉裏の寄生が多いので、薬剤は葉裏にも十分かかるよう丁寧に散布する。

ウ ほ場内外の雑草の除去を徹底し、害虫の生息、増殖源を絶つ。

エ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を控え、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



【野菜：その他の病害虫】

作物名 病害虫名	発生量 (現況)	発生量 (予想)		防除上注意すべき事項等
	平年比	平年比	前年比	
イチゴ 灰色かび病	並	並	並	<ul style="list-style-type: none"> 罹病果は見つけ次第除去する。 また、下葉かぎを随時行い、株間の通風を図って湿度を低下させる。
ナス うどんこ病 灰色かび病	やや少 並	やや少 並	やや少 並	<ul style="list-style-type: none"> 罹病葉や罹病果実は早めに除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。
トマト 葉かび病	少	少	少	<ul style="list-style-type: none"> 抵抗性品種を栽培しているほ場でも発生に注意し、すすかび病の防除も兼ねて予防散布を行う。
キュウリ 灰色かび病 褐斑病	並 やや少	並 やや少	並 やや少	<ul style="list-style-type: none"> 開花後の萎れた花卉に、灰色のかびを認めたら防除を開始する。 初期防除を徹底する。
キャベツ 菌核病 黒腐病 コナガ	やや少 並 やや少	やや少 並 やや少	やや少 並 やや少	<ul style="list-style-type: none"> 罹病株はただちに抜きとり処分する。 形成された菌核は、ほ場へ残さないよう、ほ場衛生に努める。
レタス 菌核病 灰色かび病 腐敗病	やや多 やや多 並	やや多 やや多 やや多	やや多 やや多 やや多	<ul style="list-style-type: none"> トンネル内が多湿にならない管理を行う。

農薬の安全・適正使用、飛散防止対策の徹底を！

福岡県では、農薬の安全かつ適正な使用及び保管管理、使用現場における周辺への配慮を周知徹底するとともに、農薬による事故を防止することを目的として、安全使用講習会の開催や啓発チラシの配布等を関係機関、団体と一体となって取り組んでいます。散布者の安全はもちろん、人畜・隣接作物・河川等への配慮について、ご指導をお願いします。

1 農薬適正使用の徹底

○適用作物、使用量や濃度、使用時期、総使用回数などの※ラベルをよく確認し、使用基準を遵守する。

※農薬の種類によっては、登録の内容がメーカーによって異なるので、ラベルをよく確認する。
(例：スミチオン水和剤40は、メーカーによって適用作物名や適用病害虫名が異なる)

※適用作物を誤認して農薬を使用しないよう注意すること。

(例：① しゅんぎく と 食用ぎく、② トマト と ミニトマト、③ さといも と ずいき、
④ とうもろこし と ヤングコーン 等)。

2 飛散防止対策の徹底

○風向、散布方向、散布時間、散布圧などに留意する。

○飛散しにくい農薬（剤型）や飛散が少ないドリフトレスノズルを使用する。

○散布ほ場周辺の収穫前の作物には十分注意する。

3 保護具の着用

○農薬の散布時には、ラベルの注意・警告マークをよく確認し、マスク、保護メガネ、ゴム手袋等を着用する。

4 農薬の散布後は、必ず散布器具を洗淨

○噴霧器、薬液タンク、ホースなどの散布器具を十分に洗淨する。

5 防除履歴の記帳

○薬剤散布が終わったら、作物名、ほ場の場所、散布年月日、薬剤名、使用濃度、散布量等を正確に記帳する。

6 空容器の処分

○空容器は、産業廃棄物処理業者に委託するなど、適切な処分を行う。また、野焼きは法令で禁止されているので行わない。

病害虫防除所では、病害虫の発生状況と防除について
ホームページでお知らせしています。

ホームページ
電子メール

<http://www.jppn.ne.jp/fukuoka>
kfok0301@sp.jppn.ne.jp